虫の目 鳥の目 魚の目
MUSHI NO ME TORI NO ME UO NO ME

温暖化により「四季でなく二季に」無関心では何も解決しない

千尋
Chihiro

花見を終えたらもう暑い、さんまがおいしいのにまだ暑い。「暑い暑い」が挨拶の定番に。もう一つ加わったのが「いったい、いつまで続くの？この暑さ」である。春のコートは出番なく、秋の長袖シャツは一、二回着たかどうか。二〇二五年は春と秋の存在感が薄くなったことを実感した年だった。「『現代用語の基礎知識』選　二〇二五　T&D保険グループ新語・流行語大賞」のトップ一〇の一つに、地球温暖化の影響で夏と冬が長期化する日本の気候を表した「二季」が選出されたのもうなずける。

この二季化を観測データから科学的に明らかにしたのが、三重大学の立花義裕教授の研究グループ。日本の「夏の期間」が一九八二～二〇二三年の四二年間で三週間ほど長くなったと報告している。「冬の期間」はほとんど変わらず、夏の日数だけが増える傾向にある。春と秋が短くなり、夏が長引くことで、季節は「夏と冬」の二つに近付きつつある。

研究グループは、地球温暖化による海面水温の上昇を主因に挙げる。熱帯域の積乱雲の活発化や、太平洋高気圧とチベット高気圧の二重の覆い、ラニーニャ現象なども、夏を一層長く、厳しい季節にしている。

春と秋が短くなると、暑さや寒さに体を慣らす時間が減る。熱中症のリスクが増し、風邪も引きやすくなる。急な気候の変化が心身に影響する「二季化バテ」という言葉さえ生まれた。多くの人が「四季でなく二季だな」と感じ始めている。二酸化炭素（CO_2）排出量の増加は人為的な部分も多く、無関心では何も解決しない。異常気象に関心を持ち、温暖化防止のために何ができるか改めて考えたい。

知見や技術で戦災復興支える

新しい年を迎え、両国国技館（東京都墨田区）で行われる大相撲初場所を楽しみにしている人も多かろう。注目は新大関の安青錦。ウクライナではアマチュア相撲の選手として実績を残していたが、突然、練習拠点を失った。二〇二二年四月、戦禍を逃れるようにして来日。関西大学の協力を得て稽古を積み、その後に元関脇安美錦が師匠の安治川部屋に入門。二〇二三年九月の秋場所で初土俵を踏んだ。

二〇二五年三月の春場所で新入幕を果たすと、秋場所には新小結に昇進するスピード出世。九州場所は、十二勝三敗で並んだ横綱豊昇龍との優勝決定戦を制し、初めて賜杯を抱いた。来日して約三年半で大関に昇進し、選んだ道は間違っていなかったと言えよう。

入門後、戦火が続くウクライナには帰省していない。「帰りたい気持ちはある。友達と会いたい。自分の街で散歩したい」。故郷への思いは心にある。初優勝後、ドイツに住む両親と電話で話した。涙を流して喜んでくれたという。母国に関して多くを語らないが、胸に秘めた望郷の思いは出世への意欲、角界で生き抜く覚悟につながっているのだろう。

日本や大相撲の文化をひたむきに学び、己や技を磨いてきた二十一歳がウクライナに吉報を届けた。「更に上を目指している。これから」と安青錦。大関の地位に満足せず、更なる高みを目指す。

ウクライナは長引く戦争で道路や橋梁、上下水道など基幹インフラに甚大な被害を受けている。がれき処理の作業には不発弾やアスベスト（石綿）などの危険が伴い、オペレーターの安全確保も大きな課題だ。更に多くの男性が前線に動員され、労働力不足も深刻化している。

日本の建設産業界は東日本大震災の復興で高台移転の知見や、感染症対策として遠隔施工などの技術を磨いてきた。戦災復興を支えられるはずだ。

巨匠の息づかいに触れる

子どもや一般に建設現場を開放する見学会は夏休みの恒例行事だが、近頃は工事が佳境を迎える時期に合わせて開かれることも多い。ものづくりの奥深さと魅力を伝え、建設業とそこで働く人への理解を深めてもらう貴重な機会となっている。

着工から一四〇年以上が過ぎてもなお工事が続くスペイン・バルセロナのサグラダ・ファミリアは、もはや見学の域を超えた世界的な観光名所だ。未完の「世界遺産」では、高さ一七二・五メートルのメインタワー「イエスの塔」が二〇二六年に完成し、主要部分が仕上がる見通しという。この年はサグラダ・ファミリアを設計した建築家アントニ・ガウディ（一八五二～一九二六年）の没後一〇〇年にも当たる。聖堂へとつながる巨大な階段など外構の仕上げは、二〇三四年頃に完成予定とされる。

イエスの塔完成という歴史的な節目を迎えるに当たり、ガウディ没後一〇〇年の公式展覧会が日本で一月十日に開幕。ガウディの手記や直筆の書簡、彼が使用した制作道具をはじめ、未公開の資料や模型、スケッチなど学術的にも極めて貴重なコレクションが数多く並ぶ。これほど多くガウディ財団の所蔵資料が同時公開されるのは世界で初めてだそうだ。

更に筆跡心理学的分析による世界初の研究成果を通じて、ガウディの内面と創造思考を読み解く。学術と体験が融合した、これまでにない深度でガウディの精神世界に迫るのも見どころの一つとなっている。

大人から子どもまで楽しめる参加型アートで、ガウディ建築に出会える。来場者がサグラダ・ファミリアの一部を完成させていく体験では、未完成の象徴でもあるこの建築が、今も多くの人々の手で築かれ続けていることを実感できる。ガウディが見た自然との調和の世界を、手と感性で感じ取れる体験になる。

寺田倉庫G1（東京都品川区）を会場に三月十五日まで開かれる。春には大阪でも開催を予定。巨匠の息づかいに触れる貴重な機会にしたい。